

上級日本語クラスにおける読解教材について
- 夏季日本語教育実習での実践を通して -

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科

日本語文化専攻 博士前期課程

野田 大志

1. はじめに

筆者は、平成 19 年の 7 月 30 日から 8 月 3 日にかけて行われた夏季日本語教育実習（於名古屋大学大学院国際言語文化研究科）に実習生として参加し、花クラス（「花クラス」は上級レベルの日本語学習者 3 名のクラスの呼称である。）の授業を担当した*1。

本稿では、花クラスでの授業実践を踏まえ、上級日本語クラスにおける読解教材について考察する。その際主に、実際に実習において使用した読解教材のうち、新聞と雑誌という二つの教材について、その教材の選定理由、実際の授業実践によって明らかになった長所と短所、その教材に対する学習者の反応、及び今後上級日本語クラスで使用する読解教材の選定における検討課題、といった点について検討することとする。

2. 学習者のニーズ及び学習目標について

本節では、実習の前段階に行ったインタビューやアンケートから、読解について学習者のどのようなニーズが得られたのか、また、それを踏まえて読解について花クラスでの学習目標をどのように設定したのかについて確認しておく。

今回、花クラスに属することになった学習者 3 名*2 に共通するのは、名古屋市内の小・中・高等学校で ALT（英語）として勤務している英語母語話者、という点である。（それぞれ、母国はカナダ、イギリス、オーストラリア、と異なり、日本滞在期間も、日本語学習歴も異なっている。）

*1 夏季日本語教育実習の全体像、花クラスの授業の流れや学習者の情報等について、詳しくは『夏季日本語教育実習報告書』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻のホームページ上で公開）を参照されたい。なお、花クラスは、二人の実習生（筆者とレベッカ・テイラー氏）で担当し、基本的に一人が授業をしている際にはもう一人がティーチングアシスタントとしての役割（学習者の読解の補助や、ディスカッションへの参加）を果たした。

*2 学習者の詳しいプロフィールについては、『夏季日本語教育実習報告書』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻のホームページ上で公開）を参照されたい。

実習参加者を対象として行った、メール利用によるニーズ調査のためのアンケートや、対面インタビューの結果、前述の3名が総合的にほぼ同程度の日本語能力を有すると判断でき、同一のクラスとした。(この3名は、日本語能力において得意な技能、不得意な技能は異なるものであった。この点は後述する。)

3名は共通して、日本語を話す力と聞く力が相対的に高く、日常的な日本語における(特に砕けた会話における)コミュニケーションについては大きな支障はないということが、筆者を始めとする教師(実習生)側からも判断でき、また、学習者本人もそのような意識を有していた。そして、3名それぞれ、若干のニーズの相違はありつつも、最も必要とし、高めたいと考える技能は日本語の文章の読解であるということが共通していたため、5日間の花クラスでの授業を通して、読解の指導に重点を置いて行うこととした。

花クラスのシラバスを作成するにあたり、ニーズ調査に基づき、(1)に示す5点を花クラスの学習目標として設定し、また花クラスの学習者3名にも、授業初日にこの目標を提示した。

- (1)1.読解について：よりスムーズに読めるようになること
- 2.話題について：読める・話せる話題を広げること
- 3.丁寧語について：丁寧語をより自然に使えるようになること
- 4.発音について：日本語らしいイントネーションで話せるようになること
- 5.文法について：難しい文法を使えるようになること

(1)に提示した5つの目標のうち、読解指導に関する目標は1と2である。この二つの目標を達成するためには、5日間(1日4コマ)という限られた期間の中でより多くの、そしてより様々なジャンルの文章を学習者に読ませる必要があると考えた。そこで、筆者は読解の指導を、もう一人の花クラス担当の教師

(実習生)であるテイラー氏はアクセント・イントネーション、丁寧語、文法の指導を主に行ったが、指導内容に関わらず、5日間全ての授業で必ず何らかの読解教材を配布し、授業に用いることとした。

なお、学習者3名は、読解力を高めたいというニーズは共通していたものの、具体的にどのようなジャンルの文章を読みたいかということについては特に希望が出されず、また日常生活において3人ともマンガを読む以外に日本語の文章を読む機会がほとんどないという点で共通していた。そのため、コース終了後に少しでも日本語の文章を読もうという意欲が高まるような文章で、かつ、日常生活において触れる機会の多い文章を教材として選定する必要があると考えた。

次節では、具体的に筆者が担当した授業において使用した二つの読解教材について検討する。

3．上級日本語クラスにおける読解教材について

3．1 はじめに

本節では、夏季日本語教育実習において、花クラス(上級日本語クラス)で筆者がどのような読解教材を選定したか、その選定の意図はどのようなものであったか、その教材を使用してどのような授業を行ったか、その教材を使用したことで学習者からどのような反応が得られたか、について、新聞と雑誌という二つの教材に絞って考察する。

なお、各時間の終了時に、学習者にアンケート用紙の記入を依頼した。このアンケートの質問項目は以下の通りである。

読解教材(読み物)そのものに関する難易度・面白さ・役に立ったか、

の3点(4段階評価)

読解教材を使用した活動(授業)について難易度・面白さ・役に立ったか、の3点(4段階評価)

読解教材を読んだ感想や活動の感想、その他授業に関するコメントについての自由記述

なお、このアンケート結果も、以下における考察の検討材料とする。

3.2 個々の読解教材について

花クラスにおいて筆者が担当した授業では、以下の5つの読解教材を使用した。

国際交流基金のホームページ「みんなの教材サイト」に掲載されている「日本人の食生活」という読み物^{*3}

読解教育のためのホームページ「リーディングチュウ太」^{*4}に掲載されている「日本人の喜怒哀楽」という読み物

日本の新聞、1つは日本の雑誌(日経ホーム出版社『日経トレンドィ』2007年8月号)

読売新聞のホームページ「YOMIURI ONLINE」に2007年8月1日に掲載された、外国人児童の不就学に関する記事^{*5}

この内、本節では、日本の新聞と雑誌について、具体的に取り上げることと

^{*3} http://momiji.jpf.go.jp/kyozai/Resources/Reading/Reading_index.php を参照されたい。

^{*4} <http://contest.thinkquest.gr.jp/tqj1999/20190/jpn/chujo/chujo05.html> を参照されたい。

^{*5} <http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/news/20070801ur01.htm> を参照されたい。

する。

3.3 新聞を使用した授業

まず、本節では、日本の新聞を使用した授業について考察する。

花クラスにおける新聞を使用した授業では、日本の新聞の特徴を知り、実際に新聞記事を読むことに挑戦してみる、ということを目指とした。これは、3名の学習者がいずれも、日本の新聞を読みたいという意識がないわけではないものの、(母国では日常的に新聞を読んでいたにも関わらず)実際に日本の新聞を読んだ経験がないという点で共通していたため、授業を通して従来できなかったことができたという達成感を得るためである。

ところで、日本語教育における読解の指導に関する多くの先行研究において、文章を読む前に学習者の、文章の内容に関する背景知識を活性化することの必要性が指摘されている。(例えば、小川(1991)では、実生活での読みの環境に近づくために、文章を読む前に必ず関連する知識を喚起させておくべきである、という点が述べられている。)

しかし、例えば新聞は、記事において扱う内容そのものは日本の新聞が他の国の新聞と大きく異なっているわけではないが(この点は、授業の中でも学習者から指摘された)、見出しや記事の配置をはじめとする新聞全体の構造(レイアウト)は特徴的であり、この構造に慣れていない学習者は多いのではないかと考え、筆者の担当する授業においてはその構造について指導することから始めた。

具体的に新聞を扱った授業の流れは以下の通りである。まず、授業当日に購入した、朝刊3紙(朝日新聞・読売新聞・毎日新聞)を学習者に渡し、筆者は中日新聞を手にとった。そして学習者に、筆者は自宅で中日新聞を読んでいるが、他の3紙については詳しく知らないの、学習者に全体を読んでもらい、

後からその新聞の特徴を一人一人発表してもらうように伝えた。そして、学習者それぞれが新聞を読む前に、日本の新聞の一般的な構造について学習者に指導した。ここでは、主に(2)に示すような点について、実際の新聞を手に取り、必要に応じて見出しや記事、罫線を指差しながら指摘した。(この際、特に、一つの紙面につき、記事がどのように分かれているか、それはどのように判断できるのか、記事をどのような順序で読んでいくべきか、について重点的に指摘するようにした。)

(2)・見出しを見るだけで記事の内容の概略がつかめる。

- ・見出しは、助詞の省略がなされたり、名詞で文が完結するなど、(文)構造が特殊である。^{*6}
- ・記事の最初に要旨がまとめてあることが多い。
- ・新聞記事は縦書きなので、縦に読む必要がある。
- ・記事のかたまりと記事のかたまりとの間は線で区切られていることが多い。
- ・記事の終わりに氏名が書かれている場合は、その記事を執筆した記者を示している。

以上のような点をはじめとして、新聞の構造を指導した後、(3)に示すような点をホワイトボードに書き、この点に基づいてそれぞれ異なる新聞社の新聞を実際に読み、全体像を把握するように指示した。

(3)・どんなジャンルの記事が何ページ目に、何ページ分くらい掲載されているか？

^{*6} この点は、立松(1990)においても指摘されている。

- ・(文章の書き方、文字の大きさ、色使いをはじめとして)読みやすい点は? 読みにくい点は?
- ・興味深い記事、面白そうな記事は?
- ・母国の新聞と比べて、似ている点は?異なる点は?

そして、20分ほど使って学習者に新聞に目を通してもらい、前述の点について発表してもらった後、最後に筆者が朝日・読売・毎日・中日の4紙について、簡単な違い(購読数の違い、それぞれの新聞において重視しているジャンル、それぞれの新聞社の主張の違いなど)について説明し、授業を終えた。

授業後のアンケートや学習者との会話の中から、この授業では特に、前半で行った、教師が学習者に新聞の構造を説明する、という試みに対して良い反応が得られた。例えば、アンケート*7には、「これまでこのような活動をしたことがなかったので、とても面白かった。」「とても役に立った。日本の新聞はパズルのようだが、この授業を受けるまではそのパズルの全体像が掴めなかったから。」「(新聞の構造というある種の)日本の文化を勉強することができた。」と書かれていた。

また、授業後に、3名の学習者の内、最も語彙力(漢字の理解力)が高い学習者は、新聞の構造を理解できたことで新聞を読むことが苦ではなくなったと述べてくれた。残りの2名はやや語彙力が低いため、(ルビがない状態で)具体的な記事を精読することまではできないものの、新聞の構造が分かったため今後は語彙力を伸ばして新聞を読む練習をしてみたい、と述べてくれた。したがって、学習者の読解力自体を高めるまでには至らなかったものの、この授業での活動が、新聞という身近にある読み物を(コース終了後に)読んでみようという学習者の動機付けに繋がったことは意義があったと考えられる。

*7 アンケートは英語での回答であったが、本稿では筆者が日本語訳したものを記載した。

従来、市販の上級日本語の読解教材*8 などにおいても新聞記事が題材となることが少なくないが、今回の授業を通して、新聞を教材として選定する場合、何らかの記事をピックアップしその記事の内容を学習者に把握させることだけでなく、新聞全体を教材として使用し、前述のような活動を通して、構造・内容を共に含めた新聞の全体像を把握させるということも授業と、それをきっかけにした自律的学習価値との関連において価値があるのではないかと感じた。

但し、前述の通り、今回行ったような活動に留まると、新聞を教材として使用することで学習者の読解力そのものを向上させることには直接的には繋がらず、また、今回の活動は教師主導であり、実際の日常生活で新聞を読む環境に近いというわけではない、という問題点がある。これらの問題点を解決する上では、例えば、教師が新聞の構造を説明した後、それぞれの学習者に見出し読みをしてもらい、その中で興味を持った記事を一つピックアップし、精読させる、という活動も（速読・粗読と精読を一つの活動の中で両立させるという上でも）有効性が高いのではないかと考えられる。

3.4 雑誌を使用した授業

次に、本節では、雑誌を使用した授業について考察する。

花クラスにおいて雑誌を使用した授業では、（それまでに学習者 3 名とも、ほとんど日本の、日本人向けの雑誌を読んだ経験がなかったため）実際に日本の雑誌を読んでみるということを目標とした。教材として選定した雑誌は、日経ホーム出版社の『日経トレンドィ』2007年8月号である。この雑誌は、日本の様々な流行について取り上げる月刊誌であるが、2007年8月号では冒頭で、雑誌全体の4分の1以上の分量を割いて、「07年上半期ヒット商品ランキング」

*8 柿倉侑子他(2000)『日本語上級読解』(アルク)がその一例である。

という特集が組まれていた。この特集では、まず最初のページに、「(「売れ行き」「新規性」「市場創出性」「影響力」という四つの観点に基づいて編集部が選考した) 2007年上半期のヒット商品の1位から15位^{*9}までのリストが掲載されており、次のページからは、1位から5位までは2ページ分を使って、6位から15位までは1ページ分を使って、その商品がどんなものか、ヒットに至った経緯やヒットの理由、その商品を使用する層、その商品の社会への影響力などについて、カラーの写真や図表などをふんだんに用いて説明されていた。

この雑誌を使用した授業の流れは以下の通りである。(以下に示す活動をできると考えたことが、この雑誌の記事を読解教材として選定した大きな理由の一つである。)まず学習者に、2007年上半期ヒット商品ランキングの、順位と商品名のみを記載したリストを見せ、このリストが何を表しているのか推測して答えてもらった。(この時点で、学習者から正解は出てこなかった。)そして、実際の雑誌を見せながら、どのような雑誌なのか簡単に説明し、最初に提示したリストが、雑誌の中で特集されているヒット商品ランキングであることを説明した。そして、学習者それぞれに対し、ランキングに掲載された商品の中で知っているものはあるか、実際に使用したことがあるものは何か、全く知らないものは何か、について答えてもらった。(結果として、学習者が名前は聞いたことがあるものの、具体的に知らないというものが多く存在した。この状況は、この時点では教師も同様であった。)そして、リストの中から、3つの商品(1位~5位から1つ、6位~15位から2つ)を選んでもらい、記事を読んだ上で、他の学習者に後からその商品について紹介してもらい、ということを行った。そして、それぞれの学習者に、選んだ商品に関する記事のカラーコピー^{*10}を渡

^{*9} 1位：wii&wiiスポーツ、2位：クロックス、3位：ピリーズブーツキャンプ、4位：東国原知事、5位：クリスピー・クリーム・ドーナツ、6位：PASMO/nanaco、7位：人生銀行、8位：フリクションボール、9位：東京ミッドタウン、10位：AXE、11位：メガマック、12位：ACUO、13位：バルサン氷殺ジェット、14位：アラウーノ、15位：和漢箋

^{*10} カラーコピーを渡したことに對して、学習者から良い反応が得られた。読解教材の選定にあたっては、その教材の色を含めたデザインを考慮することも、学習者の読解の意欲を高める一つの要素となりうるのではないかと考えられる。

し、15分程度で読ませた。この際、インフォメーションギャップを活用するため、記事を読んでいる間は他の学習者にその記事を見せないように指示した。(なお、学習者それぞれが雑誌の記事を読んでいる間は教師とティーチングアシスタントはそれぞれの学習者の近くに行き、読めない漢字や意味の分からない語彙について説明するなど、読解の補助を行った。) 15分後、学習者一人一人、順番に、記事に基づいてその記事で扱われている商品について他の学習者に紹介させ、その商品についてもっと知りたいこと、疑問に思うことについて発表している学習者に質問させる、という活動を行った。

この雑誌を教材として使用したことで、学習者からの反応として最も大きかったのは、記事の内容が面白く、新鮮な話題であるため、読もうという意識、また、他の学習者の発表(商品の紹介)を聞いて質問しようという意識が高まった、という点であった。今回の学習者は3人とも名古屋市内の小・中・高等学校で勤務しているが、学校の生徒や同僚と日本の流行について話す機会が少なくないということで、この活動を通して知った知識はすぐに日常生活での日本人とのコミュニケーションにおいて活用できる、とのことだった。(また、このことから、今後この雑誌を続けて読んでみたい、という意志を述べた学習者もいた。)

また、この活動では、それぞれの学習者が他の学習者が読んでいる記事に書かれた商品について詳しい知識や情報はほとんどない、という状況であったため、他の学習者に日本語で正確に、分かりやすく記事に書かれた商品について紹介するためには、それだけその記事を正確に、深く読む必要がある。そして、その商品について紹介した際に、その紹介が分かりにくいという質問が他の学習者から出た際には、紹介した学習者は再度記事を確認して紹介し直す、という場面も少なからず見られた。したがって、「話す」ために「読む」、「読める」ことで「話せる」というように、一つの活動の中で「読む」ことと「話す」ことという、少なくとも二つの技能を意識的に高めることが可能となる、という

点もこの教材を利用することの利点の一つであると考えられる。岡崎(1990)は、日本語上級学習者が、その日本語能力を中間言語的なものから第二言語に飛躍的に接近させるためには、日本語のみをたよりにして「伝達の座礁」を切り抜けるための相互交渉をいかに多く経験するかにかかっている、としている。この点を達成するということを考える上でも、今回の授業における、読解をベースにした学習者間のインタラクションという活動には意義があるのではないかと考えられる。

また、この授業で扱った雑誌は日本人の成人を対象としており、豊富な写真や図表が読解の助けになるものの、記事の中には難解な語や表現もあり、大意を掴むことは容易ではなかったため、この活動を通して現時点での自身の日本語能力を改めて認識することができた、という点を2人の学習者がアンケートに書いていた。(なおこの点は、当初教師が雑誌を教材として選定する際に意識していなかったことであったため、今後、読解教材の内容やレベルと学習者の自己評価との相関関係、という観点についてより検討を重ねてみたいと考えている。)

次に、この活動を通して気付いた、今回のような雑誌の記事を教材として使用する際の課題は、学習者の読解達成度のより正確な評価である。

今回扱った記事は、学習者の読解への興味を高めるために、内容としても新鮮で話題性が高く、豊富な写真や図表によって記事の内容理解が促進されるようなものを選定した。この活動では、学習者が記事を読んだ後で他の学習者にその記事で扱われている商品をどの程度正確に、具体的に紹介できるか、ということによって教師が学習者の読解力を評価することとなった。しかし、学習者は、仮に記事をしっかりと読み込めていなくとも、写真や図表からその商品について想像したり、既存の知識を活用することで、ある程度その商品について他の学習者に紹介することも可能である。(実際に、そのような紹介の仕方をした場合もあった。)したがって、このような問題点を解決するためには、事前に

教師が選定した読解教材を細部に渡って読み、学習者がその文章を正確に読めているかどうか判断しにくいような場合は、必要に応じて、その文章を正確に読むことでしか答えられないような質問を学習者に与える必要があると感じた。

4. 今後の課題

最後に本節では、花クラスにおける読解指導全体を踏まえ、読解教材の選定に関する今後の検討課題を5つ述べる。

まず、授業を通して、また授業後のアンケートの結果を通して、(少なくとも、今回の花クラスの学習者のように、学ぶ意欲の高い学習者にとっては)読解教材の難易度と読解への意欲との間に相関関係は見られず、むしろ内容の興味深さと読解への意欲との間に高い相関関係が見られるということが分かった。そして、学習者にとっての内容の興味深さに関わる要素としては、題材の新鮮さや話題性、学習者の日常生活への関与の度合い、という点が大きいということも分かった。このことを踏まえると、既に市販されているような読解教材に関しては、殊更日本の特徴や日本と他の文化との相違を強調しているものが少なくないという点や、(その教材が出版された時点では新奇な話題であったとしても少しでも年月が経ってしまうと)題材の新鮮さに欠ける、という点から、問題も大きいと考えられる。したがって、教師は常に身近にある様々なジャンルの文章を読み、(学習者のニーズも考慮して)教材として使用できるものはピックアップして精読する、という作業が常に必要であると考えられる。また同時に読解教材の選定の前提として、幅広い話題に対応できるように、常に時代の流れに敏感であることも求められると考えられる。

次に、アンケートの結果から、どの学習者も読解を通じて理解する語彙や漢字が増えたことに高い価値を見出していることが分かった。今回の実習では、学習目標を設定し、教案を練る段階で、文章の読解という点に主眼を置いてい

たが、その中での語彙や漢字の理解力の向上という点をピックアップして考え、そのための活動を具体的に考える、ということに欠けていた。今後、読解活動の中でこの能力の向上を効率的に行う方策についてより具体的に検討することに加え、読解教材の中に一般的に理解する必要性や意義が高いような語彙や漢字が多数使用されているかどうか、という点を読解教材の選定にあたっての一つの要素とする必要もあるのではないかと考えられる。

3 点目に、既に前節で述べた通り、今回の授業を通して、学習者が読解活動を通して自身の日本語能力の自己評価を行っている場合が多々あることに気付いた。この点について今後より意識化し、読解教材と学習者の日本語能力の自己評価との相関関係についても探してみたいと考えている。

4 点目に、今回の授業では各授業後に読解教材の話題に関して学習者と教師とでディスカッションを行ったり、その中で日本人の意見を聞いてみたいという点をピックアップしておいて最終日の授業でそのいくつかのトピックについて日本人ゲストを教室に招待してディスカッションをする、という機会を設けた。これは、筆者にとっては、学習者に毎回の授業で扱う教材を読む動機、目的意識を高めること、そして静的ではなく動的に読解を行うことを念頭においた上でのことであった。しかし、実習終了後に欧米圏の留学生と話す機会の中で、(今回の花クラスの 3 名の学習者をはじめ)少なくとも欧米圏の学習者は(日本人の相対的な特徴とは対照的に)そもそも文章を批判的に読むことができ、教師が意図せずともある程度何らかの意識を持って動的に読解を行うことができる、ということが分かった。この点を踏まえると、今後欧米圏の学習者を対象に読解の指導をする場合、その教材によって、求められた情報を適切に文章からピックアップする能力を高める活動ができるか、という観点から選定する必要があり、かつ、そのような効率的な活動はどのように行うべきか、という点について具体的に検討していく必要があると感じた。(実際に、今回の授業では、教師が、与えた読解教材から読み取ってほしいと意図する範囲を超え

て議論が活発化してしまうような場面もあった。)

5 点目に、今回の授業では基本的に、ある教材を使用した活動においては粗読を指示し(例えば新聞を使用した授業)、ある教材を使用した活動においては精読を指示する(例えば雑誌を使用した授業)、というように、予め教師から精読、粗読を指示した。限られた期間の中で様々な構造、内容の読解教材に触れてもらうという上ではやむをえないことではあったが、今後は、駒井(1990)や小川(1991)も指摘するように、読解教材の種類や読解の目的に合わせて、精読、多読、粗読の何れか適当な読み方を選び、その読み方で文章全体の意味の把握を可能にさせる、という、より現実的な読解能力の向上を実現すべく読解教材を選定し、読解活動を工夫する必要があると考えている。

以上の5点を踏まえ、今後、本稿において主張した点の妥当性を、実際の日本語教育の現場における実践の中でより客観的に検証していきたい。

[参考文献]

岡崎眸(1990)「第二言語習得の飛躍を目指す上級指導 - 討論活動のあり方 - 」『日本語教育』71号。

小川貴士(1991)「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75号。

川口義一・横溝紳一郎(2005)『成長する教師のための日本語教育ガイドブック上』ひつじ書房。

駒井明(1990)「上級の日本語教育」『日本語教育』71号。

立松喜久子(1990)「上級学習者に対する読解指導」『日本語教育』72号。